

『今月の天候と農作業』

通巻第5609号
11月号
平成29年11月2日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	50	30
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、平年並の確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 11月4日(土)～ 11月10日(金)

期間の前半は高気圧に覆われて概ね晴れますが、後半は気圧の谷や湿った空気の影響で雲が広がりやすいでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 11月11日(土)～ 11月17日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、前線や湿った空気の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 11月18日(土)～ 12月1日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆大豆

1 収穫と乾燥

収穫時に大豆の青立ち株や雑草が混ざると茎汁による汚損粒の原因になります。青立ち株にはカメ虫被害粒も多いため必ず抜き取ります。成熟期は完全に落葉し、莢色が黄色から変色後、莢がカラカラと音がする頃です。コンバイン収穫では、さらに10日程経ち、枝がポキポキ折れる時期です。茎水分の高い早朝の収穫は避けます。逆にバインダーや刈払機では衝撃でのロスを防ぐため、早朝か夕方に収穫を行います。播種が遅れたほ場では莢の位置が低くなることがあるので、泥の混入に注意します。高温での乾燥作業は、しわや皮切れを起こすため、温度を30℃以下にします。

◆ソバ

1 収穫と乾燥

バインダーや手刈りでは、子実の70～80%が黒変した頃の朝夕に収穫を行い、10日程度、島立てし、子実が粉状になるまで乾燥します。コンバインでは、80～90%黒変した時ですが、茎葉に水分が多いと機械に詰まるため注意します。乾燥は静置式乾燥機などで温度は30℃以下とし、その後は風選し、粒選別機などで夾雑物を除きます。

◆麦類

1 ほ場の準備

排水が良好なほ場を選び、碎土は丁寧に行います。麦は酸性土壌に弱いため、石灰質資材で酸度を調整します。堆肥は1t程度施用し、元肥は地区基準を参考にします。

2 種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病対策として種子消毒を行います。播種は早すぎると凍霜害を受けやすく、遅れると穂数不足になります。山間部では11月中旬、沿海部では同下旬から12月始めに行い、周囲や3～5m間隔に溝を堀り湿害対策を行います。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆共通事項

気温も下がり、本格的に暖房を開始する時期となります。今月末までは寒暖の差が大きい
ため、夕方早い時間から内張ビニールを閉めきって保温すると、ハウス内の湿度が高まり、
病害が発生しやすくなります。最低気温を確認しながら加温機が稼働する程度の温度管理を
心掛けましょう。また、日によって最低気温が高い場合もあるため、特に、きゅうり、トマ
ト類は、夜温がそれほど下がらない場合は内張ビニールを閉める時間を遅くする（場合によ
っては閉めない）など、状況に応じた管理を行いましょう。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培は、子づる及び孫づるの収穫期ですが、成り疲れにより草勢が低下しやす
い時期です。適期収穫を行い、不良果は早めに摘果します。かん水は10a当たり1.5～
2t/日を目安に行い、追肥は草勢や着果状況に応じて施用します。窒素成分で10a当
たり5～6kg/月を目安にかん水時に液肥として施用します。ハウス内の温度管理は午前中
26～28℃、午後23～25℃、夜間12～14℃とします。

促成きゅうりは摘心栽培、つる下ろし栽培ともに、植付けの早いものは主枝収穫期から側
枝収穫期です。一作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草姿をコン
パクトに仕上げ「成りグセ」をつけることが大切です。10℃を目安に、できる限り低温で
の夜温管理を行います。夜温が高い場合は、果実肥大を優先せず、内張ビニールを解放し、
ハウス内の湿度を下げるなどの対策を行います。追肥は主枝収穫開始と同時に開始し、10
a当たり窒素成分で0.2kg/日を目安に行います。かん水は果実肥大に合わせて、10a
当たり0.8～1.0t/日を目安に少量多回数でのかん水管理を行います。日中の温度管
理はハウス抑制きゅうりに準じて行います。

◆ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量も多くなり、最初の収穫最盛を迎えます。
着果負担も大きく、収穫遅れになると、さらに草勢低下を招き、うどんこ病等の発生を助長
するため、適期収穫を心掛けましょう。草勢維持のため、果実の着果状況に応じたかん水、
追肥を行います。目安としては、かん水は10a当たり1.2～1.5t/日、追肥は10
a当たり窒素成分で0.2kg/日です。下旬より収穫の終了した第3分枝のフトコロ枝を順
次除去し、風通しと採光の改善を図りましょう。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトともに収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持
のため、かん水と追肥を行います。追肥は草勢を見て、大玉トマトで第3果房、ミニトマト
で第5果房開花時より開始し、10aあたり窒素成分で1kg/1週間（ミニトマトの場合は

2割程度増やす)を目安に施用します。ハウス内の温度は、午前中25～28℃、午後22～25℃、夜間8～10℃とします。ミニトマトの夜温は大玉トマトより1～2℃高めに管理します。

◆いちご

今年の花芽分化は、やや早い傾向でしたが、頂芽の出雷は平年並みのようです。夜温管理として開花肥大期は10～12℃、着色期は8～10℃、収穫期は7～8℃を目安に、ほ場の生育状況に合わせた温度管理を行います。中旬より電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は2.5時間、間欠電照は夕方5時から翌朝6時まで5分間/時間、暗期中断は深夜1時間を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行います。

(黒木 正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆たまねぎ

定植時期となります。地力の高い排水の良いほ場を選定し、十分な根域を確保するための深耕や表面排水を促すための排水溝の整備をします。排水が良くない畑では、可能な限り畦を高く造成します。

植付けの深さは3～4cmです。深植えすると収穫時に縦長球(レモン球)の発生が多くなるので注意が必要です。植付け後3～5日間は株元を中心にかん水を行い、活着を促します。

◆らっきょう

分球を始める時期です。分球及び生育促進のため、10a当たり窒素成分で5kg程度を追肥し、土寄せを行います。

◆食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期です。腐敗防止のため罹病いもや傷いも等を選別して貯蔵します。いもは9℃以下の低温にあたると腐敗しやすく、18℃以上では萌芽します。貯蔵の適温は13℃、適湿度は90%のため、貯蔵庫の温湿度管理に留意します。収穫直後のいもは呼吸作用が大きいいため、一度に大量に入庫すると庫内のCO₂濃度が上昇したり、湿度が高くなり結露する場合があります。入庫時から空調を積極的に利用して結露を防止しましょう。空調が無い場合は貯蔵適温の時間帯に換気をして庫内を除湿し、新鮮な空気と入れ替えましょう。

◆さといも

中生種の収穫期となります。枯れ上がり症状の見られたほ場や芽つぶれ症、乾腐病の疑いがあるものは翌年の種芋としては使用せず、優良なものだけを子いもが離れないように株毎に保存します。ほ場で保存する場合は低温障害を受けないよう、厚めに培土するなどの対策が必要です。

また、今年の疫病の初発には、残さ処理の不徹底によると思われる事例がありました。収穫が終わったさといもの畑は早めに片付けましょう。残さの分解を進めるため、トラクター速度を遅く、ロータリー回転を速くし、できるだけ細かく破碎します。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

◆レタス

外葉が10枚前後になると結球を始めます。生育適温は15℃から20℃で、10℃以下では生育が遅れます。温度が高すぎると筍球（縦長の形状）等になりやすく、低すぎると生育遅延や硬く締まった小玉になります。結球後は5℃以下になると品質が低下しやすくなります。気象変動の大きい月なので下旬にはトンネル資材を設置し、急な寒波にも対応できるように準備しましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆中晩生かんきつ全般

樹体に肥料が十分に吸収されるには12℃以上の地温が必要とされ、今月がその時期に当たります。年明けに収穫予定の日向夏や不知火などのかんきつ類ではこの時期の施肥が翌年の花芽の充実の有効とされています。11月中旬までに施肥を行いましょう。

◆完熟きんかん

今年は7月中旬以降の花が結実している園が多く、昨年よりも結果時期が遅くなっています。10月からの秋季加温で十分に肥大が確保された園では、昼温や夜温を徐々に落としていきます。肥大不足の園では、秋季加温を継続しましょう（昼間の温度は28℃、夜間は外気温+3℃の15～16℃を目安）。

◆マンゴー

花芽分化に向けた管理として、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度で抑え、夜間の最低気温6～8℃程度を維持します。

十分な低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。5割程度の花芽発生を確認したら、ハウスの夜温を15℃に向けて徐々に上げていきます。急速に温度を上げて花芽を生長させると、花粉の形成不良や子房の生育不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーを引き起こします。開花が始まるまではできるだけ昼間の高温を避け、じっくりと花芽を生長させましょう。

2 果樹園共通

防風林や防風ネットの整備は冬の仕事です。防風林は、あまり密閉状態にせず、適度に風が通るように整理します。防風林が高すぎたり、密閉度が高いと、果樹の発芽が遅れたり、アザミウマ類などの害虫被害が多くなるため、注意が必要です。

防風ネットは傷んでいる部分をしっかり補修しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆電照ギク

今月は気温が低下し、結露しやすい状況が続きます。曇雨天で夜温が高いと加温機が作動せず、白さび病が発生しやすくなります。親株床から予防を徹底し、本ぽへの持ち込みを防ぐとともに、本ぽ内では送風で結露を防ぐなど、湿度対策を組み合わせることで予防を行いましょ

う。年末出荷作型は摘蕾期になります。花首の徒長防止や花のボリュームを出すために摘蕾作業は適期に実施してください。

◆スイートピー

採花が開始されます。天候の変化に十分注意し、曇雨天が予想される場合は液肥、かん水を控えるなど草勢に応じた肥培管理を行ってください。11月上～中旬には夜間に施設のサイドを閉める気温になります。早い時間帯に暖かく湿った空気を閉じ込めると湿度が高まり、結露しやすくなるため、換気除湿を行うなど湿度調整に努めましょう。

◆デルフィニウム

中山間地域で1番花の収穫が終了したほ場は、ロゼットを打破させるためにハウスを開放し、低温に遭遇させてください。沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を活用し、茎の硬化を図り、収穫後は適切な前処理を行いましょ

う。また、2番花のロゼットを回避するため、1番花の花穂伸長の終了時から電照を開始しましょ

◆トルコギキョウ

生育後半の過剰施肥と曇雨天により、ブラスチングが多発するため、追肥は発蕾前には終えましょう。10月に定植したものは、チップバーン等が発生しやすい時期に入るため、一時かん水を控え、根域を広げるとともにカルシウム剤の葉面散布や硝酸カルシウム水溶液のかん注処理を行いましょう。

◆ラナンキュラス

気温、地温が低下してくるので徐々にかん水間隔を広げ、根の伸長を図ってください。最低気温が5℃を下回るようになると保温・加温が必要になりますが、昼間は低温になりすぎないように15℃程度を目安にできるだけ換気を行い、品質の向上に努めるとともに増収を図りましょう。

(中村 広)

畜 産

◆家畜

今月は朝晩の冷え込みが厳しくなる時期に入るため、朝夕の畜舎カーテンの開け閉めを行い、畜舎内の温湿度環境の改善を図りましょう。また、本格的な冬を迎える前に幼畜用の保温機材の点検と子牛の保温箱や風よけ等の寒冷対策の準備を行いましょう。さらに、和牛や乳牛は気候が安定し、生産性が安定する時期ではありますが、飼料作物の収穫と作付けの時期でもあり、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されることから、交配期にある牛については、朝夕の観察を徹底しましょう。

豚では、生産性が安定する時期ではありますが、PED等の疾病予防のため、豚舎の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒を徹底しましょう。

鶏については、鳥インフルエンザの発生リスクが高まる時期に入ります。防鳥ネットの点検・補修を必ず行い野鳥や野生動物の侵入を防ぎましょう。また、出入口の消毒や畜舎周囲への消石灰の散布も定期的に行いましょう。

◆飼料作物

牛の粗飼料では、飼料用イネ、二期作・遅まきトウモロコシ、ソルゴーなどの収穫時期とイタリアン・エン麦などの秋冬作の作付け時期が重なる時期です。飼料作物の栽培においては、飼養管理に影響が出ないよう計画的な作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。また、イタリアン・エン麦を植え付ける前には土壌分析を行い、分析結果に基づいた適性な施肥管理（苦土石灰、ヨウリン等）を行いましょう。

(三角 久志)

工芸作物

◆茶

1 寒害・凍害防止対策

冬期の寒害・凍害の防止対策では防風垣や防風ネットの設置を行います。また、幼木園では、敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなるため、敷草はできるだけ畦間中央に寄せるようにします。万が一、幹割れが発生した場合は速やかに株元へ土寄せを行います。

2 病虫害の防除

一番茶前の密度増加が気になるカンザワハダニに対しては整枝・裾刈り後に行う越冬前の防除が重要です。飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら専用ノズルを用いた適正防除に努めましょう。

また、近年県内茶園でもチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。この害虫は、茶葉の裏に寄生して越冬するため、茶葉の裏面を観察し見慣れない虫を発見した際は、最寄りの農業改良普及センター等へ連絡してください。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで実施し、11月下旬頃までには行いましょう。

また、伐採後は葉枯らし乾燥を1～2カ月程度実施しましょう。

2 発生操作

ほだ起こし時期は、品種によって異なるため、最低気温（例：低中温性品種であれば最低気温が10度前後に下がった時）を考慮して決定しましょう。

また、ほだ起こし後に散水を行うと、より発生しやすくなります。

なお、風が強く吹き込むほだ場は乾燥により、しいたけの生育が不良になったり、変形しやすくなるため、防風ネット等を設けましょう。

(永野 学)

◆たばこ

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 葉たばこの大きな減収要因である立枯病・疫病等の土壌伝染性病害の菌密度の低減と土壌消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を10日おきに3回以上行いましょう。

2 耕作予定ほ地の土づくりのため、石灰・ヨウリン等の散布を行い土壌改良に努めまし

よう。

石灰散布を行う場合は土壌消毒との間隔を1ヶ月以上空けることが必要となります。

3 土壌消毒を実施する際には薬害・公害のないよう十分注意し、農薬使用基準に従い土壌水分が60%程度（軽く握った時に割れ目が2～3個できる程度）の時期を選んで実施しましょう。また、土壌消毒剤の空缶は地域で決められた方法で適切に処理しましょう。

4 良質堆肥（10aあたり1200kg以上）施用に向けて材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるために水分60%程度保ちながら月に1回程度の切り返しを行い、堆肥の腐熟促進を図りましょう。

5 販売終了後は、乾燥機・貯蔵庫・作業場の清掃を徹底しましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

11月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	やや少	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入の防止に努めます。一部の地域で、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
	ハスモンヨトウ	やや多	大豆での発生がやや多い状況で推移しています。中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。なお、施設開口部には防虫ネットを張って野外からの侵入を防止します。
	タバココナジラミ	やや少	タバココナジラミには薬剤の効きにくいタイプの発生が確認されていますので、薬剤散布後は防除効果を確認し、不十分な場合は、異なる系統の殺虫剤による追加の防除を行います。
冬春きゅうり	べと病	並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。 さらに、窒素切れによる草勢の低下や逆に効き過ぎによる過繁茂は、発病が助長されるので適正な肥培管理に努めます。
	うどんこ病	並	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病(MYSV)	—	ミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病(MYSV)の感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し埋却処分するか、完全に枯れるまで密封処理します。
ミナミキイロアザミウマ	並		
冬春ピーマン	斑点病	並	いずれの病害も多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。うどんこ病は、乾燥した条件で発生しやすいので過乾燥に注意します。 黒枯病は、多湿条件で発病しやすいので排水を良好にするとともに、マルチの利用、日中の換気を行います。
	うどんこ病	並	
	黒枯病	やや多	
	シキイロアザミウマ	やや少	ミナミキイロアザミウマは10花当りの寄生虫数が1頭から防除が必要とされています。多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底します。
ヒラズハアザミウマ	並		
冬春トマト	葉かび病	並	多湿条件下や肥料切れで発生しやすいので、ハウスの換気を良好にするとともに草勢維持に努めます。
	トマト黄化葉巻病(TYLCV)	並	トマト黄化葉巻病はタバココナジラミによって媒介されるので有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り適切に処理します。
	タバココナジラミ	少	
冬春いちご	うどんこ病	やや少	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。 炭疽病は、多湿にならないようにほ場の排水対策を十分行うとともに、発病株は周囲への感染を防止するため早期に除去し、ほ場外に持ち出し適正に処分します。
	炭疽病	やや少	
	ハダニ類	並	収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。
アブラムシ類	やや少		
果樹全般	果樹カメムシ類	—	地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
かんきつ類	ミカンハダニ	やや多	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生葉率30%または1葉当り虫数0.5~1頭を目安に防除する必要があります。また、収穫前の防除は、収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	やや多	本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でない翌年の一番茶への影響が大きくなります。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

